

奈良女子大学
地域貢献事業実施報告書

「知る・学ぶ・伝えるequality事業報告書」

平成28年度

平成 28 年度地域貢献事業報告
知る・学ぶ・伝える equality 事業

1. 目的（概要）

男女共同参画の根幹であるequality（平等）の実現を目指し、「多様な個性の尊重」についての様々な話題を連続講座の中で提供する。初めて知ったこと（知る）、関連する問題や背景などについて学んだこと（学ぶ）、一人ひとりが大切にされる社会を作るために毎日の生活の中で自分ができること（伝える）を参加者に持ち帰って頂くことを目的とする。

2. 実施担当者・連携組織等

（1）奈良女子大学

主催： 男女共同参画推進機構、社会連携センター

共催： アジア・ジェンダー文化学研究センター

（2）連携組織等

後援： 奈良県、奈良市

3. 活動内容

本学は、基本理念の第一に「男女共同参画社会をリードする人材の育成—女性の能力発現をはかり情報発信する大学へ—」と定め、平成 17 年に奈良女子大学男女共同参画推進室を設置した。（＊平成 24 年 12 月に男女共同参画推進機構に改編。）そして基本理念と男女共同参画社会の実現に向け、国が定める基本計画等に基づき、教育・研究・運営等のあらゆる場面で環境整備を進めてきた。第 2 期中期目標・中期計画（平成 22 年 4 月～平成 28 年 3 月）には、学内外における男女共同参画の推進が定められ、この目標・計画達成に向けた取り組みの一環として、平成 22 年度に本事業を開始した。

この事業は、男女共同参画の根幹である「多様な個性の尊重」と「人間の平等(equality)」を身近な問題として捉え学ぶことを目的として、男女共同参画を含む人権に関する様々な話題を講座等を通して提供するものである。平成 22 年度は、ビデオ教材を用いて、日本国憲法に「男女平等」が書かれた経緯を知ることから始め、家庭における性別役割分業やアジア、ヨーロッパ、アメリカの女性を取り巻く環境について学んだ。平成 23 年度は、「幸せに生きるためのヒント」と題した 5 講座を開催。平成 24 年度は、「自分を好きになること」（自尊感情の育成）をテーマとした 4 回の講座を実施。平成 25 年度は「心を元気にすること」をテーマに、①寂しさ・悲しみ、②不安・恐れ、③怒りの感情の受け止め方・対処の仕方に関する 3 回連続講座を開催。平成 26 年度は、「あるがままの自分を生きる」ことについての 2 講座を開講。27 年度は社会連携センター単独主催で「五感と対話」をテーマとした 2 回の講座を実施した。

今年度（平成28年度）は「性的マイノリティー」をテーマとして「性同一性障害」「LGBT ツーリズム」の観点から2回の講座を開講した。

広報活動として、連続講座のチラシとポスター（ポスターは第1回のみ）を作成し、奈良県内の公民館、関西圏内の大学の男女共同参画推進部門に郵送した。また近鉄奈良駅、JR奈良駅の観光協会にチラシ配置を依頼した。更に、本学HPとあわせて、国立女性教育会館のHPに告知掲載されたほか、第2回講座は外務省の「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム」WAW2016の公式サイドイベントとして当該HPに掲載された。

テーマとして性的マイノリティーを取り扱ったため、LGBT当事者の方々に参加願ったほか、第2回講座では東京のLGBT専門旅行会社の方にも来場いただいた。毎回当講座を楽しみに参加しているというリピーターからは、講演前にLGBTというテーマに対し興味が持てないという意見があったが講演に来て話を聞き、その内容を持ち帰り伝えていただくということこそ“知る・学ぶ・伝える equality”講座の目的に合致していると考えられる。

今後の広報活動としては、テーマに沿った機関へのチラシ発送などを加えるとより一層参加者の満足を得るものになるのではないかと考えられる。

講演開催時の無料託児については、両回とも利用はなかったが、より多くの方に参加機会を提供するため今後も受け皿を用意すること続けることがのぞましい。

以下各講座の内容を報告する。

第1回

【講座名】 “知る・学ぶ・伝える equality” 連続講座 第1回

「性同一性障害の変遷-大衆化と非病理化」

【日時】 2016年8月8日 17:00～18:00

【場所】 奈良女子大学総合研究棟文学系S棟128教室

【講師名】 鶴田幸恵氏（千葉大学文学部准教授）

【参加人数】 40名

1996年に「性同一性障害」の概念が日本に登場してから20年が経過した。もともとこの概念は医療の立場で使われていた。性同一性障害は一つの疾患であり、医療的な処置により本来の性に戻る（治る）と考える。それに対して「トランスジェンダー」は当事者の生き方を表わす概念であり、性を移行することを指す。この二つの概念はしばしば混同して使用されがちである。

この概念が登場すると、治療をするための手段として「性同一性障害」の言葉が使用され社会に広まった。この概念はもともと日本に存在していた男女の通念を脅かさないため、急速に社会に広がったと考えられ



る。誰でも知っている概念になると、医療的な概念でなくなる（非病理化）。

このような概念の変遷によって、当事者の自分自身に対する捉え方も変化し多様化してきている。これまでは男性（あるいは女性）として生きてきたが、ある時から服装を変える、行動を変える、体を変えることによって女性（あるいは男性）に変わる。以前の性を捨て去る人もいるが、これまでの性もこれからの性もどちらも認めて生きる人もいる。つまりトランスジェンダーを自分のアイデンティティとして受け入れる。職場を変えずに性を変える人もいる。たとえば男性（あるいは女性）として就職し、同じ職場でそのまま今度は女性（あるいは男性）として受け入れられ、仕事を続ける。周囲の人々はすでに彼（彼女）のことを疾患とは見ない。しかも性の変更は中年になってからが多い。転職しないことは有利である。社会の概念の変化が、当事者の自分に対する捉え方を変え、周囲の人の当事者に対する感じ方も変えている。

【講座の様子】



【アンケート調査】

回答人数 30人 回答率 75%

Q1 性別 男性 23.3% 女性 60.0% 答えたくない 10.0% 未記入 6.7%

Q2 所属 教員 33.3% 職員 13.3% 大学院生 13.3% 学部生 16.7% 一般 23.3%

Q3 情報源 チラシ 32.4% ポスター 26.5% 本学 HP 8.8%

男女共同参画推進機構 HP 5.9% 知人・友人からの紹介 14.7%

講師からの紹介 5.9% 未記入 5.8%

Q4 イベント参加回数

初めて 20.0% 2～3回 26.7% 4～5回 16.7% 6回以上 36.7%

アンケートまとめ（自由記述より）

性同一性障害の非当事者参加者にとり、新しい知識を興味持って増やす機会になったことが伺える。また当事者及び非当事者双方にとり、性的マイノリティーに属する人々が生

きやすい社会を考える契機にもなったようだ。開催時期などについては、「土日の方が良い」「夏休みで気楽に参加できた」の回答があり、今後の開催日程決定の参考とする。

第2回

- 【講座名】 “知る・学ぶ・伝える equality” 連続講座 第2回
「多文化主義とLGBTツーリズムの推進-オーストラリア・シドニーを事例に-」
- 【日時】 2017年1月27日 16:30~18:00
- 【場所】 奈良女子大学記念館2階講堂
- 【講師名】 吉田道代氏（和歌山大学観光学部教授）
- 【参加人数】 36名

世界的にみて、LGBT はまだまだ差別されており、2014年時点 78 か国にて法律により同性愛が禁止されていて、中には死刑を科す国も存在する。違法ではない国においても LGBT 性的マイノリティーの人々は不自由を感じている。人間は公的空間→社会的空間→私的空間の順に自由度が増していくものであり、同性愛者の場合は公的空間でさえ公表を憚らない。しかしながら性的マイノリティーの人々は私的空間でさえ自分を表現できず不自由なのである。そのような状況の中、彼らは安心して特定の場所に集まり自由に過ごせる、一時的に空間を占拠できることに大きな価値を見出している。

1969 年アメリカでの「ストーンウォールの反乱」から始まったゲイのパレードから、世界の各地に性的マイノリティーの権利を主張するパレードやイベントが広がっている。大都市でありゲイイベント等エンターテインメントが充実した特定地域への「LGBT ツーリズム」という観光分野が生まれた。はじめはニッチ産業であったが、旅行先地域にもたらされる高経済的利益を理由に大手企業も参入し大きな市場となっている。「LGBT ツーリズム」の特徴としては特定の地域に集中するということである。特に LGBT ツーリストがハネムーンで訪れた場合の経済効果は高く、世界中でそれらを取り込む争奪戦が行われている。

「LGBT ツーリズム」の滞在先としては、ニューヨーク、サンフランシスコ、ロンドン、イビザ、ミコノス等の都市、更には国や地方自治体が歓迎しているアムステルダム、シドニー、テルアビブ等があげられる。その中でシドニーはオーストラリア最大の人口を有する都市で、経済はサービス業中心で「都市イメージの独自性」、「国際知名度の向上」の2点をターゲットにする同市にとって、「LGBT ツーリズム」は恰好の商材である。ゲイシティとしてのシドニーであるが、毎年2月第二木曜日から3月第一土曜日まで行われる世界的に有名な LGBT の祭典「ゲイ・アンド・レズビアン・マルディ・グラ」を軸に盛り上がりを見せる。スポンサーには大手企業が付き、行政からの助成金も集まり盛大に行われる。



しかしながら「LGBT ツーリズム」の経済効果が先行しており実は同性愛者の法的地位があまり高いわけではないという現実もある。また昨今のインターネットの発達などにより交流スタイルも変化し、家庭を持つカップルも増え LGBT が特別視されなくなりつつあり同時にツーリストが減少しつつある。

日本における「LGBT ツーリズム」は、大手ホテルが企画する同性愛者のハネムーンプランや LGBT ツアーを取り扱う旅行会社の存在等があげられる。しかしながら国内の LGBT の存在が見えにくく、行政は積極的に参画できていない状況である。

日本で「LGBT ツーリズム」が根付くためには、LGBT が見える存在になり性的マイノリティーへの対応力が必要となる。それが進むと「LGBT ツーリズム」というカテゴリーの意味もなくなるのである。

【講座の様子】



【アンケート調査】

回答人数 20 人 回答率 56%

Q1 所属 教員 35.0% 職員 10.0% 大学院生 0.0% 学部生 35.0% 一般 20.0%

Q2 情報源 チラシ 37.5% ポスター 41.7% 奈良女子大学の HP 4.2%

男女共同参画推進機構の HP 0.0% 社会連携センターの HP 0.0%

メールマガジン 0.0% 知人・友人からの紹介 8.3% 講師からの紹介 0.0%

その他 8.3%

Q3 イベント参加回数

初めて 30.0% 2～3 回 25.0% 4～5 回 10.0% 6 回以上 35.0%

アンケートまとめ（自由記述より）

LGBT ツーリズムという新しい分野を紹介することにより LGBT 単独でなく、他分野への広がりを感じてもらえたようだ。今回テスト期間中の開催になったので、学生の参加者をふやすにはこの時期以外の方がという意見があった。またテーマへの要望については LGBT を深めてもらいたいという意見や、ジェンダーについてなどの意見もあった。今後

の参考とする。

4. 成果と見通し

今年度のテーマである「性的マイノリティー」について、LGBT という言葉すら知らない非当事者が「知る」、また LGBT 当事者にとり有意義な情報を「知る」、マイノリティーにもマジョリティーにも新しい内容を自ら「学ぶ」知識を増やす、そしてそれぞれ持ち帰り、LGBT について「伝え」みな平等に生きやすい環境を築くという意味で、事業名の「知る・学ぶ・伝える equality」を生かした有意義な講座であった。

大変濃くて深い内容の素晴らしい講座をして下さったお二人の講師の方、足を運んで下さった参加者の皆様、そして講座の企画・広報・運営にお力添え下さった学内外の全ての方々に、心からお礼を申し上げたい。